

論文名： 現代中国語の可能表現について
— “能”と“会”の意味特性及び両者の使い分けを中心に—

氏名 ZHANG Sujuan

(以下要約を記入する)

現代中国語の可能助動詞の“能”と“会”はどちらも「能力」と「可能性」を表すことができるが、意味合いにおいて、両者は重なりながらも厳密な使い分けが存在する。“能”と“会”の使い分けに関する先行研究が多く見られ、様々な問題点が解明されつつあるが、未解決の問題点も依然として数多く残されている。例えば、“能”と“会”に関しては、「能力」「技能」「可能性」を基軸にした従来の説明は両者の特徴をよく捉えているものの、“能”が表す「能力」と“会”が表す「技能」の棲み分けや「可能性」の定義に関する解釈は不十分であり、さらに、「可能性」を表す場合における両者の使い分けなども大きな課題として残されている。

本論文は先行研究を批判的に考察し、これらの問題点の解明を中心にさらに考察を行った。本論文は次の7章から構成される。

- 第1章 序章
- 第2章 先行研究の分析及びキーワードの定義
- 第3章 「能力」と「可能性」について
- 第4章 「能力」を表す“能”と“会”の使い分けについて
- 第5章 「可能性」を表す“能”と“会”の使い分けについて
- 第6章 “能”と“会”の語用論的機能の相違
- 第7章 終章

第1章では、本論文の研究目的、考察対象となる“能”と“会”の位置づけ、研究方法、活用するデータベース及び本論文の構成について述べた。

第2章では、“能”と“会”に関する代表的な先行研究の成果を概観しながら、先行研究の問題点を指摘し、さらに可能のキーワードとなる「能力」、「技能」、「可能性」の概念を論じた。最後に、先行研究で異議されている「可能性」を表す“能”の解釈に対し、本論文の立場を論述した。

第3章では、先行研究でも言及されているように、文脈によって、同じ文は能力としても、可能性としても捉えられる場合があるという指摘から、これまでの先行研究であまり触れていない“能”と“会”が表す能力と可能性の関係について考察した。具体的には“能”と“会”が能力を表す場合と可能性を表す場合における意味分類を分析し、さらに、能力から可能性へ展開するプロセスを明らかにした。

第4章では、まず、能力の意味を表す“能”と“会”の意味分類を考察し、両者が意味

上重なり合う部分と独自の部分を考察した。また、本章では、数量表現を動量表現、名量表現、性状量表現に大別し、具体例を通して“能”と“会”が数量表現との共起状況を考察し、両者が共起する数量表現のタイプの相違を分析し、数量表現との共起状況を通して両者が持っている独自の意味特性を明らかにした。また、能力を有していないという否定の意味を表す場合は、“不能”があまり用いられず、“不会”または可能補語形式の“V 不了”が用いられることが多く見られる。本章では、“不能”と“不会”の使い分け、さらに、“不能 V”と“V 不了”の異同の考察を通して“不能”の意味特徴を分析し、能力を表す場合における“不能”と“不会”の根本的表現機能を考察した。

第5章では、従来の研究ではそれほど分析がされていない可能性を表す“能”と“会”の意味特性及び両者の使い分けについて考察した。“能”も“会”もある根拠をもとに事柄の生じる可能性を表すことができるが、両者の使い分けに見られる話し手の認識の焦点に相違が観察される。本章では、事柄における動作の遂行や状態の成立が可能になる要因を外的要因と内的必然性に大別し、話し手の認識の焦点がどの要因に当てはまるかという観点から“能”と“会”の使い分けを捉える。“能”が用いられる場合は、話し手が動作・状態の実現が可能とするだけの外的条件を取り上げて述べているが、“会”が用いられる場合は、外的要因の有無がすでにわかっている、または外的要因の有無をあえて問題にする必要がないということを前提として話し手が認識している。この認識のもとで、話し手が知識、考え方、習性、法則など物事の内的あり方に着目し、その内的あり方を踏まえれば、事柄が必ず起こりえるという内的必然性を取り上げて述べているという結論が得られた。さらに、この結論では“能”は積極性の含意を伴う、“会”は非期待的マイナスイメージであるという先行研究の指摘も統一的に捉え直すことを試みた。

第6章では、“能”と“会”のもつ語用論的機能の相違点について考察をした。“能”と“会”はある事柄がこれから生じる可能性を表すのが一般的であるが、すでに発生した事柄の可能性を表す場合には適用できないとされている。しかし、本稿では実現完了の事柄に“能”と“会”が用いられる用例に注目し、先行研究を踏まえ、収集した言語資料を調査しながら、どのような文脈で実現完了の事柄に“能”と“会”が用いられるのかという“能”と“会”の使用条件を分析し、さらに、それぞれの使用条件における“能”と“会”の相違に見られる両者の語用論的機能について論じた。

第7章では、本研究の結論と独自性をまとめ、今後の研究課題を記述した。